

ディスコグラフィー掲載

ディスコグラフィー 【2019No.129】 (HP 掲載)

分類：CD

作曲家：J.S.Bach

曲名：幻想曲ト短調 BWV542/1 他

演奏：塚谷水無子

発売：King Records

No.：KICC-1374

概要：



収録曲：

01. 幻想曲 ト短調 BWV542/1  
Fantasie und Fuge g-Moll, BWV 542 ~ Fantasie
02. 協奏曲 ニ短調 BWV974 (原曲=マルチェロ :オーボエ協奏曲) 第1楽章:(アンダンテ)
03. 協奏曲 ニ短調 BWV974 (原曲=マルチェロ :オーボエ協奏曲) 第2楽章:アダージョ
04. 協奏曲 ニ短調 BWV974 (原曲=マルチェロ :オーボエ協奏曲) 第3楽章:プレスト  
Konzert d-Moll (nach Alessandro Marcello) Allegro - Adagio - Presto
05. カンタータ《主よ、人の望みの喜びよ》BWV147  
Herz und Mund und Tat und Leben, BWV147
06. コラール《わが魂は主をあがめ》BWV648(シュープラー・コラールより)  
Choral: Meine Seele erhebt den Herren, BWV648
07. トッカータとフーガ ニ短調 BWV565 トッカータ

08. トッカータとフーガ ニ短調 BWV565 フーガ

Tocata und Fuge d-Moll, BWV565

「アンナ・マグダレーナの音楽帖」より 5 篇

Klavierbuchlein für Anna Magdalena Bach

09. ゴルトベルク変奏曲のアリア BWV988/1

10. メヌエット ト長調 BWV Anh.116

11. メヌエット ト短調 BWV Anh.115

12. ミュゼット ニ長調 BWV Anh.126

13. アリア《あなたがそばにいれば》BWV508

14. 小フーガ ト短調 BWV578

Fuge g-Moll, BWV578

15. 協奏曲 ト長調 BWV592 (原曲:ザクセン=ヴァイマル公エルンスト) 第 1 楽章:(アレグロ・アッサイ)

16. 協奏曲 ト長調 BWV592 (原曲:ザクセン=ヴァイマル公エルンスト) 第 2 楽章:グラヴェ

17. 協奏曲 ト長調 BWV592 (原曲:ザクセン=ヴァイマル公エルンスト) 第 3 楽章:プレスト

Concerto G-Dur, BWV592 (nach Johann Ernst von Sachsen-Weimar)

18. 前奏曲とフーガ ニ短調 BWV539 前奏曲

19. 前奏曲とフーガ ニ短調 BWV539 フーガ

Præludium und Fuge d-Moll, BWV539

20. フーガ ト短調「大フーガ」BWV542/2

Fantasie und Fuge g-Moll, BWV 542 ~ Fuge

使用楽器：フランツ・シュニットガー・オルガン (1725 年製作)

録音日：2017 年 3 月 27・28 日

録音場所：聖ローレンス教会 (オランダ・アルクマール)

2017 年 9 月 13 日発売の Bach Organ Works II というタイトルの CD で、演奏は塚谷水無子です。[村井裕弥氏を偲ぶ会](#)に出席した際、奏者にお会いし、CD の存在を知って求めたものです。

本 CD では、ともかく意欲的でサービス精神に富んだ選曲であり、録音もよく、シュニットガーのオルガンの能力を活かし、それぞれの曲の曲想に応じた弾き方をしているように感じます。

ここに収録された曲のいくつかは、[My Sonic Signature Gold の導入\(33\)](#)と [My Sonic Signature Gold の導入\(34\)](#)で紹介しています。これらに収録されている曲のうち、トッカータとフーガニ短調について、My Sonic Signature Gold の導入(33)の ARCHIV SLAM-1 のヘルムート・ヴァルハ演奏のアナログ盤、および LONDON SLA 1005 の

カール・リヒター演奏のアナログ盤と My Sonic Signature Gold の導入(34)の Ars Vivenali MRC021 の Sieberman のオルガンを使用した演奏の CD を聴き比べてみました。

ヴァルハトリヒターのアナログ盤との比較では演奏について、また Sieberman のオルガンを使用した CD とはオルガンの音の違いに注目して聴いてみました。

ARCHIV SLAM-1 のヴァルハ盤は、盤質は繰り返し聴いたもので、1956 年録音と記載されていますが、盤質のハンディキャップや録音年代を超えて、荘重で厚みのある音で、地味ではありますが、ヴァルハの卓越したバツハ感が伝わってきます。

LONDON SLA 1005 のリヒター盤は、HiFi 調の音で、もともと即興性のあるトッカータをリヒターが自由な発想でのびのびと演奏しています。

これらに対し、今回の CD では、時代とアナログ、デジタルの違いを超えて、同じオルガンを使用していることから、音色も似ており、まるでヴァルハが蘇ってきたかのような演奏です。

Sieberman のオルガンを使用した CD では、Herbert Collum が Reinharttsugrima のオルガンを演奏していますが、澄んだ透明度の高い音色が特徴です。

今回の CD では、すべてにおいて、録音が素晴らしく、シュニットガーのオルガンの深みのある豊かな響きがよく捉えられています。

今回の CD では、サービス精神に富んだ多様な選曲でしたが、今後もヴァルハやリヒターの演奏と正面からぶつかるような選曲でのリリースが望まれます。

以上